

「ピッチ」または「保育臨床」のこゝろ

間藤 侑

我が家には、ピッチという名の白いカナリヤがいます。今は飛ぶことができません。つい先日、私たちのちよっとした油断から、彼は仲良しの妻の命と自らの左の羽を、近所のネコに奪い取られてしまったのです。

病院から帰ってきたピッチは、あのきれいな澄んださえずりを全く忘れています。

児童文学の名作、ポール・ギャリコの「まぼろしのトマシーナ」やジョン・マーズデンの「話すことがたぐさんあるの……」を思い出します。最も大切だったもの（父への愛とネコ）を同時に失い、あるいは自分の愛する者同士（両親）の激しい憎しみ合いに巻き込まれ、共に言葉を失った少女たちの物語。

人であろうと小鳥であろうと、一瞬の暴力の嵐に、

なすすべもなく幸せをふみにじられたものの悲しみや苦しみと、やり場の無い怒りを思い、心が痛みます。

実はピッチたちは、明日にも大学の附属幼稚園へあげる約束でした。もうそれはできなくなりました。でも、羽が片方無いという理由ではありません。私たちの中に大きな気持ちの変化があったからなのです。

何日か前までの彼らは、二年あまり可愛がってはいても、ベットでしかありませんでした。だから、幼稚園のインコと交換することに特別な思い入れはありませんでした。でも今は、間違いなく大切な家族の一員だとみんな感じています。小鳥一羽の命が、こんなに重いものだとは正直予期しませんでした。

一時の感傷的な感情移入さと言われれば、そういう部分もあるかもしれません。でも、朝、籠のカバーを

取る時、帰宅して「元氣かピッチ」と声をかける時、与えられた命を懸命に生きようとしている姿に、家族一人ひとりが、それぞれにとつてのピッチの存在の意味を、心に沈めているように思うのです。

私たちの生きる世界は、普遍的客観的な因果関係と、個人的主観的な意味関係で作り上げられていると言えますが、生きることの喜びや悲しみ、苦しみや怒り、また祈りや願いは、主に意味の世界につながっています。

因果関係でものを見る時、相手は利用価値だけではないか評価されません。相手が人間でも自然でも同じことです。しかし意味関係は、互いに影響し合う関係なのです。

これは「臨床の知」の感覚に通じます。先の保育学会のシンポジウムで、「保育臨床」という考え方が、学会には珍しいほどの熱っぽさで論じられました。(この内容は、本誌の平成四年十月号で、シンポジウムの司会をされた大場幸夫氏が報告しています)しか

も、午前の大江健三郎氏の講演でも、「臨床の知」をキーワードとする時、文学と教育が本質的なところで出会うという一つの思想が語られ、深い感銘を受けました。

それは決して難しい思想ではありません。カウンセリングなどの心理臨床の場ではごく基本的な姿勢ですし、気付いていなくても幼児教育現場でも親しい感覚なのですから。

なぜなら、幼稚園の先生たちは、いつも子どもと同じ視線で接し合い、子どもの見つめる方を一緒に見ていこうとします。子どもを対象化し、客観的に観察し知的に理解しようとするよりは、子どもの心に寄り添い、共感しようとしています。それが保育臨床の心です。

それこそは、今私たちの文明が一番必要としている「感覚」ではないでしょうか。そのことに気付き、幼児教育の思想の重さを確かめる時が来ているような気がします。

(新潟大学・附属幼稚園園長)